

# Essay

Sapiarc.com

2015年6月26日(2015-6)

## 「人生百年！ 80歳まで働こう」

私が若かったころには、「人生五十年」という言い方が人間の寿命を意味するものとして、当たり前のこととされていたと思う。実際、厚生労働省が公表している平均寿命の推移を見ると、アジア・太平洋戦争が終わってから2年後の1947年の平均寿命は、男性50.06歳、女性53.96歳である。それ以前の平均寿命はもっと短く、50歳に届いていなかった。だから、「人生五十年」という言い方は違和感のないものだった。

良く知られているように、織田信長が桶狭間の戦いに出陣するとき謡い舞ったとされる幸若舞（コウワカマイ）の「敦盛」に、「人間五十年、下天の内をくらぶれば夢まぼろしのごとくなり、一度生をうけ滅せぬもののあるべきか」という一節があり、これが「人生五十年」に重なっていたのではないかと思う。信長の時代には「人間」は「人の世」を指していた（Wikipediaによる）。だから、「人生五十年」とは意味が異なり、「人の世というものは天界と比べると短いものだ」ということになる。下天の代わりに、化天と書いたものもあり、これらはともに仏教の天界の一部で、下天の一日は人間界の五十年、化天の一日は人間界の八百年に当たる。読みは、どちらも「ゲテン」らしい。自分の命がかかった大いくさに出陣するときに、これを謡い舞ったというのは、自暴自棄の感もあるが、そんなことは今ではどうでもよいことだ。

日本人の平均寿命は、上記の1947年以降、どんどん伸び続け、1960年には男性65.32歳、女性70.19歳になり、2013年には男性80.21歳、女性86.61歳になっている。女性は世界第1位のはずだ。特別なことが起こらないかぎり、この平均寿命はまだ伸び続けるだろう。平均寿命が伸びる原因は単純ではないと思うが、今の日本では、食べ物が豊富にあり十分な栄養を取っている人が多いこと、医療技術が進歩したうえに、これまでの日本の健康保険制度が世界的に見て良いことなどが挙げられよう（是正すべき点が今問題になってはいるが）。そのうえ、i-PS細胞の医療への応用も既に始まっており、この技術がどこまで安定して使われるようになるかはまだハッキリしないが、平均寿命を延ばす方向に働かざるを得ない。現在、日本には100歳以上の人たちが約6万人いるそうだ。つまり、昔ならあり得ないことだった100歳という年齢がさほど珍しくなくなっているのだ。「人生百年」になる時代も遠くはないかもしれない。

不老長寿は大昔からの人間の願いだったのだから、現在の状況がそれに近づきつつあることは、単純に考えれば慶賀すべきことだ。しかし、もう少し考えると、現況が続くことが日本の社会にとって喜ぶべきことかどうか疑わざるを得なくなる。それには下記の2つの理由がある。

第1の理由は、平均寿命のほかに健康寿命というものがあり、平均寿命と健康寿命との間に10歳以上の差があることだ。厚生労働省による健康寿命の定義は、「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」で、

もっと具体的に言うと、日常的に介護を受けずに、自立した健康な生活ができる期間だ。したがって、健康寿命は平均寿命よりも当然低い。しかし、上記の定義では、健康なのか、そうでないのかの区別は簡単にできないので、健康寿命を確実に決めることは難しいが、一般には、男性では約 10 歳、女性では約 14 歳も平均寿命より短いと言われている。今後の最も重要な課題は、平均寿命と健康寿命との差を縮めることだ。つまり、伸ばすべきなのは健康寿命であって、平均寿命ではないのだ。

第 2 の理由は、政府の社会保障費が増え続けていることだ。日本の財政は今では世界最悪の状況にあることは周知の事実だが、それに対する一般人の関心は高いとは言えず、財政健全化に向けた政治の動きは鈍い。むしろアベノミクスによって、更に悪化していることは間違いない。このことについて、最近の Financial Times が皮肉な論説を書いている。一旦は悪化しても、そのうちに良い方向に向かうというのが安倍首相らの主張のようだが、本当にそうなるという保証はない。

こういう状況下で、国民一人ひとり、とくに 60 歳未満の人たちが、今から心の準備をしておくべきことは、少なくとも 80 歳までは働くということだと思う。これが健康維持に一番良いことであることは、私は経験上確信している。また、これによって、健康寿命を伸ばすことができるので、政府の財政負担を増やさないことにも貢献できる。現役時代よりも少なくなっても収入があれば、GDP を押し上げることにもなる。自営業を営んでいる人たちは、これまでと同じように働き続ければよいので、比較的簡単だ。これに対して、組織体に勤務している人たちには、定年制があり、一定の年齢で職を離れなければならない。しかし、定年が段々に上がっている場合も多く、定年は変わらない場合でも、実質的に定年後の仕事が何らかの形で用意されるようになってきていることもある。アメリカの大学は、かなり前に定年制を廃止している。アメリカの企業に定年があることは日本と同じはずだが、日本の企業の方が定年後の職の世話をしていることが多いかもしれない。ただし、

仕事または労働というものに対する考え方が欧米と日本とでは違っていることに注意することが必要だ。欧米では、少なくとも都市部で仕事をするのは嫌なことをすることに分類されているのに対して、日本には、個人差はあるにせよ、そういう考え方はないと思う。昭和の初期まで日本人の大部分が農民だったのだから、農民が農作業を一生することは当たり前だった。

80 歳まで働くということは、必ずしも定年後も現役時代と同じように仕事をするということではない。そのあたりは、これから制度面の改正なども含めて、試行錯誤もしながら実行していかなければならないことだろう。しかし、働くという気持ちを維持していないと、働くことはできなくなってしまうことは間違いない。現役時代とは異なる仕事に付くことなどもあり得ることで、その方がやりがいがある場合もあるだろう。人の能力は多様で、実際、あの人があるようなことをしているのかと思う場合も決して少なくない。退職してから、趣味にしていたことに没頭している人も大勢いるが、趣味をプロの仕事と同じレベルにまですることは容易なことではない。私は、そういう例をたくさん見ている。趣味とプロの仕事には、基礎知識・技術の鍛え方に大きな差があることに注意しなければならない。仕事は趣味と別にする方が良いと思う。

80 歳まで働くということは、人間関係、教育、文化、宗教など、これまでの社会の在り方全般にわたる変革をもたらすだろう。人口の減少が問題になっているが、それはある程度まで 80 歳まで働くことによってカバーできるはずだ。また、人工知能やロボットが果たす役割はどんどん大きくなっていくだろう。ともかく大変な時代が到来しつつあることは間違いないので、自分の心構えをそれに対応できるようにしておく必要がある。（おわり）